

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第8回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2013

— Kobe University Homecoming Day 2013 —

10/26(土)

神戸大学ホームカミングデイ2013

出光佐三記念六甲台講堂
 12:00頃～ティーパーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第8回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索

文学部でのホームカミングデイは、午後から!!



誘い合わせて、お気軽にお越しください!

文学部ホームカミングデイ2013

- 13:00～13:30 受付 文学部 B棟132教室
- 13:30～13:40 文学部長挨拶
- 13:40～14:40 講演
 「なにが日本語と英語の根本的な違いを
 引き起こしているのか?—ひとりごとからの考察」
 西光義弘名誉教授(言語学・英語学)
- 14:40～15:10 留学生3名による体験談
- 15:30～16:00 第7回文窓賞 授賞式
 (学生レポートコンクール)入賞者授賞式
- 16:00～16:20 文窓会総会
- 16:30～18:00 懇親会 瀧川記念学術交流会館
 (参加費: 3,000円/当日)

<併設企画> 12:50～16:30
 (文学部 B棟132教室前)
 ・地域連携センター
 ・海港都市研究センター
 ・倫理創成プロジェクト
 ・日本語日本文化教育インスティテュート

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

講演 西光 義弘 先生

神戸大学文学部教授を経て、2010年3月に退官。神戸大学名誉教授となる。1975年から2年間、ハワイ大学におけるハワイ・クレオール統語構造プロジェクトに参加。85年から86年にかけてニュー・ハンプシャー大学で客員準教授として教鞭をとる。また、夏期講座小委員会委員長として日本言語学会夏期講座を創設し、軌道に乗せる。現在関西言語学会会長。主な著書・論文編著に「日英語対照による英語学概論」(くろしお出版)「類別詞の対照」(共編著、くろしお出版)などがある。

*第7回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(昨年の文学部ホームカミングデイの様子です。)

2012年10月27日(土)の午後に文学部学舎にて開催されたホームカミングデイ(文学部企画)では、藤井勝文学部長の挨拶や大学院生による研究報告のあと、樋口大祐准教授(国文学)による「平清盛と日本文化」と題した講義がありました。折しもNHKの大河ドラマ『平清盛』が放映されておりタイムリーな企画ということで、多くの受講者が先生のお話に熱心に聞き入っていました。

その後、文窓賞授賞式と文窓会総会を経て、懇親会(於:瀧川記念学術交流会館)が開催されました。懇親会では例年通り、世代や立場を超えて参加した皆さんが活発に交流する様子が見られました。ぜひ皆さまも誘いあわせのうえ、文学部ホームカミングデイにお越しください。お待ちしております。



今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!



特集/インドネシアでJICAの ODAプロジェクトに参加した1年間

第7回文窓賞 学生レポートコンクール結果速報
 同窓生の近況●文学部・人文学研究科の近況
 文学部ホームカミングデイ2013





雑感 一法人化10年を 前にして一

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 藤井 勝

学部長・研究科長を拝命して1年ですが、法人化によって大学が大きく様変わりしたことを改めて実感しています。

かつて国立大学は、国家の一機関として財政的に運営されましたが、法人化後は、国が各大学に毎年配分する運営交付金(人件費も含む)を主な原資として成り立っています。ところが、運営交付金は毎年少しずつ減額されていますので、大学を維持・発展させるためには、各種(官民)の競争的外部資金を獲得することが必至となっています。同窓生の皆さんに寄付を度々お願いしているのも、その一環です。

第3者評価というものも生まれました。法人化以降、国立大学は6年を1サイクルとして、「大学評価・学位授与機構」から評価(法人評価)を受けます。数年前の第1期終了時には、文学部・人文学研究科も法人化後の教育研究を総括した報告書を作成し、法人評価を受けました。第2

期が始まってからは、期間終了時の評価に備えるためにも、年次報告書を毎年度作成して継続的な点検をしています。また、認証評価というものも数年単位で行われ、今年は2度目の認証評価の作業が始まっています。

組織の民間化も進んでいます。それは様々なレベルに及んでいますが、一例として、安全衛生管理を挙げます。大学は、その安全衛生体制を民間に適用される法令に従って確立する必要があり、委員会の設置、そして衛生管理者の各部署への配置などが義務づけられてきました。文学部・人文学研究科でも、委員会を設置するとともに、数名の教職員が講習を受けた上で受験し、「第1種衛生管理者」資格を取得しています。かく言う私も、副研究科長だった時に、この資格を取りました。

私たちが学生だった頃の大学は、社会のなかで「聖域」のようなところがあって、一般の社会とは異なった、独自の場を形成していたように思います。その時代を経験した卒業生の方々にとっては、以上のような状況にある今の国立大学は少し物足りないかもしれませんが、見方を変えれば、大学が社会の要請をふまえて「進化」したとも言えるでしょう。



オックスフォード大学 留学生達から学んだこと

文窓会会長 16回生
池上 淑子

「文窓会」会員の皆様には、お元気でお過ごしのことと存じます。

日頃は「文窓会」に何かとご協力賜りまして有難うございます。

念願の「文窓会」事務局が、漸く昨年12月に文学部校舎内に設置されました。おかげで会員の皆様の声や要望にも対応しやすくなり、加えて文学部との意思疎通が以前にもまして図りやすくなりました。会員同士の「絆」をより強めるための交流の場となり、更には文学部の発展にも微力ながら寄与できますことを心から願っております。

さて、昨年10月来日したオックスフォード大の留学生12名が文学部での履修を終え、7月29日に全員がプレゼンテーションを行ったのち、修了式、祝賀会を終え、無事帰国しました。祝賀会終了まで福田学長が歓談されるのは文学部行事には初めてのことで、大学としても、文学部のみならず「神戸大学」とオックスフォード大学との知的交流の皮切りとして期待を寄せていることがよくわかります。

オックスフォード留学生達のプレゼンテーションは、各人8分の持ち時間を使って関心事のテーマを日本語で発

表する様式でした。流暢な日本語を10ヶ月でマスターする語学力には驚きましたが、それ以上に、取り上げられたテーマの多様性や好奇心の奥深さには圧倒される思いがしました。日本の学生すら関心事ではない問題を取り上げ、しかも質疑応答でも怖じずに答える逞しさには、「さすがオックスフォードの学生は違う」の一語に尽きません。初体験は何事も印象が強いとはいえ、「頭の構造が違いすぎる」と某先生がおっしゃったほどの感銘を受けたことは事実です。

ただショックだったのは「日本の学生は議論しようとしなさい」と言う言葉でした。自分の考えを持っていない、自己確立できていない、はっきり考えを述べないとの批判が込められた言葉でもありました。曖昧さが美德とされてきた日本文化への痛烈な一撃です。日本が、グローバル化した世界の中でしたたかに生き抜くために何が必要か指摘された気がしました。

この夏、オックスフォード大学夏季セミナーに文学部からはじめて10数名参加するという画期的なできごとがありました。おそらく、学生たちは物怖じせず自分を表現することの必要性を学んで帰国することでしょう。

文学部が、こうして国家や文化に対する知識を深め、自己確立し得た人間を輩出できる学部になり、その中から日英文化交流の橋渡しにもなるべき人材が育っていくものと、大いに期待している次第でございます。

文学部の一層のご発展と、文窓会会員の皆様のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。

神戸大学文学部生の人間力・学力・未来を応援する

第7回 文窓賞 2013年

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部で学ぶ学生たちの様々な生き様・挑戦・ビジョンにエールを贈る〈文窓賞〉レポートコンクールに、今年も去年と同じ9名の応募がありました。8月30日に藤井文学部長、奥村副学部長の先生方と文窓会役員による選考会が開かれ、白熱した討議の結果、下記の作品が受賞作に選ばれました。

■最優秀賞 (表彰状と賞金10万円)

該当者なし

今回も昨年と同じく該当者なしとなった。選考会では激しい討議が重ねられたが、この賞に該当する作品としては、今ひとつ獨創性に欠け、社会を納得させる力が不十分であるということに落ち着いた。若者にしか夢見ることのできないビジョン・体験について、また個性ある新しい世界を我々に見せてくれる、そのような作品を期待している。

■優秀賞 (表彰状と賞金5万円)

「過去を振り返って、そして大学生活への抱負」伊石 昂平 (人文学科1回生)

4歳から習い始めたチェロ。それはかけがえのないものとなった。音楽と受験勉強の狭間で揺れ動く作者。そしてたどり着いた神戸大学文学部合格。この学部でこそ芸術と学問の一体化を目指すことができるという。これからの4年間の彼の成長に大いに期待する。

「東南アジア、汗まみれ」

酒井 友樹 (国文学専修3回生)

初めての海外旅行のタイ、それに触発されてのベトナム、カンボジアへのインターンシップ参加。そこで見た発展途上国の人々のたくましさ、それに引き替え突きつけられた自分の不甲斐なさが、良く整理された文章で綴られている。3年続けての人賞であるが、一部にはあまりに無難すぎる内容であるという意見もあった。来年には酒井さんの新しい側面を期待している。

佳 作 (賞金1万円)

「私の教育実習」

河内 茉奈 (英米文学専修4回生)

「教育実習を終えて」

斉賀 万智 (国文学専修4回生)

「チェッカーコンテストに出場して」

島谷 貴大 (東洋史学専修3回生)

参加賞 (図書券2千円)

*優秀作の表彰は10月26日の第8回文学部ホームカミングデイにて行います。

*入賞者の受賞レポートは冊子にして同日の文窓会総会時に配布いたします。

◎選考基準: 元気で個性的な学生生活の獨創性や発展性に対する評価と、その活動や体験が社会をどれだけ納得させる力があるかによって選考。

◎選考委員: 藤井 勝学部長(社会学教授)
長野順子副学部長(芸術学教授)
奥村 弘副学部長(日本史学教授)
池上 淑子 靱井 修一 日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子
武藤 美也子 吉田 浩次 宮崎 典久 田中賢司 坂本 直樹

選考を終えて

総括・受賞作へのコメント

全体的に興味をそそられる内容のものが少なかった。文章表現である作品は、まず読んでもらわなければ始まらない。その努力がなされていない。まず題であるが、題は作品内容を象徴するものでなければならない。応募作品の中で合格点は「気持ち悪いと善行すら積めない」だけである。文章が練れていないにも拘わらず難解な語句が安易に使用されている。「爆誕」「堆く」これはワープロ使用によるのだろう。また本文中に()書きで言い訳めいた注釈が付く。これはメールなどの影響か。文学部生であるから、一般に通じる美しい日本語を受け継いでいくことを心がけてほしい。

(審査委員長 武藤 美也子)

インドネシアでJICAのODAプロジェクトに参加した1年間

塩見 実加 (平成20年卒業 英米文学専修)

塩見さんは2007年第1回文窓賞学生レポートコンクールで最優秀充実賞を受賞。卒業後は営業職を経験した後、目標である国際協力の活動へ。2012年から1年間の貴重な体験をご寄稿いただきました。



指導していた学校にて小学校3年生の生徒たちと。

2012年8月から2013年7月までの1年間、私は世界で最大のムスリム人口を抱える国インドネシアのスラバヤ市で暮らした。JICAのODA(政府開発援助)の一環である技術協力プロジェクト「インドネシア国教育文化省との連携によるBOP層の子供たちを対象とした教育事業準備調査(BOPビジネス連携促進)」に参加し、現地に常駐する唯一の日本人プロジェクトコーディネーターとして勤務した。

インドネシアというと首都ジャカルタやリゾート地バリが有名だが、スラバヤという街の名前を聞いたことはあるだろうか？スラバヤはインドネシア第二の都市であり、国の中でも高い成長率を誇る産業都市である。しかし、スラバヤの知名度はまだ低い。あの分厚い『地球の歩き方』の中で見開き2ページ



インドネシアは数多くの島々から出来ています。中でも最も大きく政治経済の中心地であるジャワ島の東端、東ジャワ州の中心地がスラバヤです。

で紹介が終わってしまう小さな街だ。日系企業の進出が目覚ましい首都ジャカルタの在留日本人は一人を越える中、スラバヤには未だ500人程度しかいない。私も縁あってスラバヤに住むことになった日本人の例に漏れず、2012年8月、「スラバヤ勤務です。」と聞いたとき、「分かりました。…それどこですか？」と聞き返すところから始まった。

スラバヤでの生活は驚きの連続であった。イスラム教の断食月にあたるラマダン期間には、目薬をさすことさえ諫められるオフィス環境。(水分摂取にあたる。)毎日欠かさず夜はしっかりシャッターを閉めている自称24時間営業の印刷屋。一年間ずっとComing Soonの看板がかかったままの新規開店予定レストラン。(私はスラバヤで目にするComing Soonを一切信じなくなった。)歩いているとつっこみどころが満載の街で、陽気で根っこは日本人とすごく似ているインドネシア人とともに仕事をした経験は、今までの人生の中で最もエキサイティングだったと言っても過言ではない。



インドネシア料理。インディカ米の蒸しご飯、豆のにんにく炒め、蒸したじゃがいも、焼き魚、デザートバナナです。

学生時代から志した国際協力

そもそも今回のODA、つまり日本から途上国に対して援助を行う国際協力を志したのは学生時代だった。学生時代に所属していた部活ESS(English Study Society)で英語ディベートに取り組み、世界の同世代と膝と膝とつき合わせて世界の諸問題について議論する機会に恵まれた。そこから世界の実情を自分の目で見てみたいという想いが生まれ、アルバイトをしてお金を稼いで旅に出た。ド貧乏旅行すること4年間で12カ国。世界に出てみると、色んな発見があった。内閣府が実施している国際青年育

成交流事業に応募し、一ヶ月間派遣されたヨルダン。そこで訪れたパレスチナ難民キャンプでは、難民三世(祖父母の代にパレスチナから難民として逃げてきた人)に出会った。「いつか家に帰りたい」というその人はヨルダンで生まれ育っているのに、私の日本人感覚ではパレスチナの地は足を踏み入れたことのない「外国」のようなもの。そのパレスチナを「家」と呼び、いつか帰ることを夢見ている現実の意味を改めて考えさせられた。またバックパッカーとして訪れたベトナムではストリートチルドレンのNGOを訪ねた。当時、お笑い芸人の書いた『ホームレス中学生』という本が流行っていたが、ホームレス小学生もホームレス幼稚園児もわんさかいる実情に衝撃を受けた。



オフィス風景。一緒に写っているのはプロジェクトスタッフです。メンバーのほとんど全員がインドネシアでも最も優秀な理工系大学の一つ、スラバヤ工科大学の学生または卒業生です。

これらを通じて、気付いたことがあった。「家族と一緒に暮らす、学校に行く」という私にとって当たり前だったことが、まだ当たり前ではない世界があること。民主的な選挙によって選ばれた政府と普通教育のある日本に生まれたことは世界的に見れば奇跡的なラッキーであったこと。一方で、ただ運のために極貧の国、紛争中の国に生まれてきた人もいるのである。そもそも私と彼らは乗っている土俵が違うのである。そんなことにも気付かずにすべて自分の努力の結果だと思って生きてきたことがつくづく申し訳なかった。何かの理由で日本に生まれた以上、日本人として途上国にすべきことがあるんじゃないか。こうして、私は将来的に国際協力の分野で働きたいと志した。

営業の経験を踏まえ、インドネシアの教育事業へ

そのため、大学卒業後、新卒採用ではまずはビジネスを学びたいと株式会社リクルートに入社した。上司も同僚も、本当の意味で社内ではなく顧客を見て仕事をしている人が多く、営業として多くを学ばせて頂いた。そして四年半の経験を経た後、当初から目標としていた国際協力の分野に一步踏み出した。「インドネシア国教育文化省との連携によるBOP層の子供たちを対象とした教育事業準備調査(BOPビジネス

連携促進)」案件に応募。幸い現地常駐コーディネーターとして採用されたのである。



大学生の講師スタッフ。JICA専門家から直接日本式算数の理論やトレーニングを学んだ上で、現地の小学生たちに指導してくれます。

このプロジェクトのミッションは二つ。一つ目はスラバヤ市内の小学校2校で1~3年生を対象に日本式算数を指導。それにより、初等教育で課題となっている基礎計算力を強化すること。二つ目は、その日本式算数の指導を、BOP(Base of the Pyramid)層と呼ばれる貧困層を対象としたビジネスとして展開するための現地市場調査である。チームの日本人は5人だが、現地に常駐するのは私一人。その他22名のインドネシア人スタッフとともに、次から次へと起こるトラブルを乗り越えてプロジェクトを進めた一年だった。

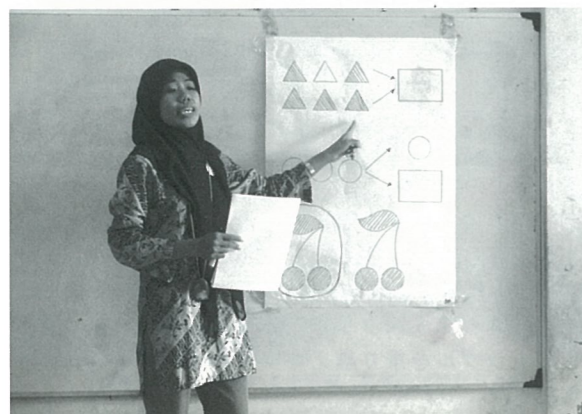
日本式算数で、子どもたちの目が輝いてきた

プロジェクトでは週に3日、小学校で算数の指導を行う。日本人が直接指導するのではなく、インドネシア人の大学生を講師として採用、トレーニングして、彼らから直接現地の小学生に教えてもらう。もちろん授業はインドネシア語で進める。小学校での指導がうまくいっているか、講師は正確に教えているか、子供は理解できているか、モニタリングをするために授業がある日はほぼ必ず学校に通った。スラバヤでの炎天下の中での小学校訪問は体力を消耗する。そ



100マス計算に取り組む小学校3年生。みんな真剣そのものです。机に立てた旗はインドネシアの国旗です。白と赤2色で成る点が日本と共通しています。

れでも学校訪問を終えた後は、いつも体にパワーがみなぎってくるようであった。子供たちはいつでも、もっと勉強したい、もっと賢くなりたいと目を輝かせていた。初めは集中力がなく騒いでいる子供たちもいたが、勉強が分かるようになり自信が付き、さらに勉強に前向きになっていく姿に感動した。そしてその子供たちの気持ちに応えようと、インドネシア人講師たちと行うミーティングを通じて指導方法や教材に細かい工夫を加え、試行錯誤を繰り返した。子供の「学びたい、学校へ行きたい」という意欲にはすごいものがあると感じた。おそらく、これはきっと大人も同じなのであろう。人間は「もっと知りたい、もっと学びたい」と本能的に求めているのではないかと感じた。その知的好奇心が盛んな子供たちにとって、学校という場所は改めてかけがえのない場所だと思う。



プロジェクトスタッフである講師が授業で教えています。彼女も大学生です。授業をしながらも生徒一人ひとりの様子に目を向け、授業後にレポートを提出してくれます。それをもとに指導が順調かモニタリングを行います。



指導した小学校1年生の学級の様子。練習問題を解いています。分からないことがあれば、みんな積極的に手を挙げて質問します。

現地の人と知恵を出し合い問題解決へ

また小学校での算数指導に対するもう一つのミッションである BOP ビジネス調査は、まさに海外で新しい会社を立ち上げる新規事業。マーケット調査、競合調査、オフィス準備など様々な業務に触れた。今回の経験で身にしみて感じたが、途上国での仕事はトラブルの連続である。例えばオフィス開設。不動産屋さんと一緒にいくつか回って物件の契約を決めた

後、相見積もりで選んだ改装業者に工事を発注。納期まで時間がなく、急いで工事を進めてほしいものの、時期悪くラマダン（イスラムの断食月）に重なった。ラマダン中は日の出から日没まで一切の飲食が禁止されている。どんなに喉が渴こうと、水は飲んではいけない。すると当然、改装業者の労働意欲も下がる。発注して日毎の給与を支払っていても、抜き打ちで工事現場にいくと職人さんたちはさぼって寝ている。現場監督にあたる施工管理の人も来ていない。日本人感覚では「お金をもらっているのに約束の仕事をしないなんて信じられない！」という気持ちになる。しかし、他の業者に発注しようともどの会社も同じようなもの。それなら、「どうすればこの人たちに働いてもらえるか？」を考えるしかない。結果的に、オフィスメンバー交代で毎朝毎夕、工事現場を見に行き職人さんたちに対して「今日夕方来るまでにエアコンの設置を全て終わらせて下さいね。」などと具体的に指示を出す。とにかくサボる隙を与えない。このように、日本とは状況が違うことは当たり前。それを前提条件として受け入れ、「じゃあどうすれば出来るのか？」を考え続けるしかない。

途上国での仕事は毎日が課題解決だが、チームのミッション・戦略を十分に理解した現地人スタッフと知恵を出し合えば、どんな課題にも必ず解決策はあると学んだ。最近グローバル人材の定義がよく議論されているが、私は現場での課題解決力がその最も重要な要素ではないかと思う。そして、一緒にゴールに向かって走っていける優秀な現地人に出会えるかどうか成功の鍵である。幸い、私はプロジェクトで非常に優秀な人たちと一緒に働くことができ、いつも彼らに教えられ助けられた。

給料は使い切る、今を全力で楽しむ

このように多くの学びが得られる仕事の時間も充実していたが、インドネシアでの生活も刺激にあふれていて面白かった。とにかく物が安い。タクシー初乗り 50 円。ランチは屋台のご飯とフレッシュジュースで合計 100 円。私が住んでいた Kos（コス）と呼ばれる集合住宅は月の家賃が 9000 円。この金銭感覚になれてしまうと、日本に帰ると高すぎてもはや何も買えない。そして私にとって面白かったのはショッピングモール。街の至るところに大型ショッピングモールがある。このようなモールは概して、インドネシア経済を牛耳る華僑をメインターゲットとしている。給料日直後の月初めは人でいっぱいのモールも、月末になると閑散としている。月末はお金をほぼ使い果たして買い物ができないからだ。インドネシア人、特に若者は基本的に貯金などしない。その月に稼いだお金はその月に使い切るのだ。このお金の使い方は日本人にはまず出来ない。今日より明日、明日よりあさってにもっと給料がよくなるという強気の表れであり、勢いに乗るインドネシア経済を象徴するようだった。



スタッフとのミーティング。日本人は私一人に対して残りのメンバーが全員インドネシア人。基本的にはミーティングは英語で行いますが、議論が白熱してくると皆、容赦ないスピードのインドネシア語で話し始めます。

そしてインドネシアで暮らす上で非常に身近に感じる宗教。一日に 5 回のお祈りの時間に合わせて、モスクのスピーカーから大音響が聞こえる。インドネシア人は概して底抜けに明るいが、それはやはり信仰の影響も大きいように思う。例えば第一志望の会社に不採用となっても、好きな人にふられても、「今回ダメだったということは、神がもっといい選択肢を用意してくださっているからだ。」という発想になる。またインドネシア人は長期的な目線ではなく目先のことばかり考えるといわれる。これには一長一短あるだろうが、概して無宗教である傾向が強い日本人にはこのような生き方はむしろ難しいのではないだろうか。長期的な人生設計をし、そのゴールを達成するために逆算して今の過ごし方を決める日本人の生き方は、大きな成果を生むことが多いが、「今」はあくまで将来の自己実現の準備期間でしかないという意味では幸せ度は低いように思う。それに対して、人生の舵取りを神の意志にゆだねているインドネシア人は、「先のことは分からない。今を全力で楽しむ。」ことが得意だ。人生は思い通りにいかない出来事が起こるのだから、あまり先々のことを考えて思い煩うことはやめて、「今を十分味わう。人生の流れに乗る。」ことも一つの生き方だとインドネシアの人々の生き方に学んだ。

Win-Win な関係は、共に作り上げることから

インドネシアでの一年は楽しく学びの多い濃い時間だった。念願の国際協力分野に一步踏み出した私にインドネシアでの経験が与えてくれたものは、意外にも「国際協力病」への気付きであった。インドネシアに常駐して仕事しても、言葉も分からない、ビジ

ネス慣習も分からない。そんな中、日本人一人で出来ることはほぼ皆無である。現地の人に教えられ、助けられ、協力してもらって、初めて物事が進むのである。そして現地の人たちは仕事のやりがいや生きがいなどややくいことを考えず、ただ生活のために一生懸命働いている。当たり前なことだが、日本人であるというだけで途上国でその人たちに与えられること、教えられることなんて何もないのである。こういう話はよく聞いたことがあったが、私の場合は途上国に身を置いて初めて心から理解できた。

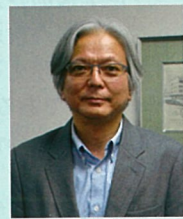
一方で途上国には本当に貧しい人も数多くいる。学校にもいかず裸足で物売りをする子供もたくさんいる。この人たちの存在は忘れてはならない。そして、日本もまた人口減少で国内市場はどの業界も飽和状態にある中で、新興市場といわれる途上国との関係なしには生き残っていけない。グローバリゼーションは弊害も多いが、もう逆行はできない。世界の相互依存は今後ますます進んでいくだろう。どうすれば日本と途上国が Win-Win な関係を築いていけるだろうか？というテーマに関心が湧いている。

途上国にとって今後重要なパートナーであり続けるためには途上国に「日本から学びたい」と思われ続ける国であることが大事だと思う。いわゆる中国や韓国が直面している中心国の罠にはまらないよう「値段が高くて日本製を買いたい」と言われ続ける国であり続けなければならないだろうし、それを実現できる個人でありたいと思う。そのために今後どのような仕事に取り組みたいか明確な答えはまだ出ていないが、いわゆる国際協力と名のつく仕事に拘わらず、途上国の人たちと「一緒に」何かを作り上げられる仕事に挑戦し、自分の専門性を磨いていきたいと考えている。途上国の人々は、言葉も慣習も価値観も大きく異なっている。それを違うから受け入れられないと拒絶するのではなく、「違っているから面白い。違っているから学ぶべきことがある。」という気持ちをいつまでも大切にしたい。



小学校での指導最終日。一年間共に学びあった生徒たちの顔はみんなイキイキしています。基礎計算力も信じられないほど伸びました。

次の半世紀へと飛躍！ 今、文学部・人文学研究科に起こっていることは？



文学部・人文学研究科の近況

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 藤井 勝

卒業生の皆さんにとって、昨今の神戸大学文学部・人文学研究科はどのように映っているのでしょうか。あまり印象がないという方もおられるかもしれませんが、今回は、幾つか特徴的なことについて紹介したいと思います。

最初は、研究のことで。

文部科学省は、大学の国際競争力強化の必要性から、新しい政策を推進していますが、その一環として「研究大学強化促進事業」に着手し、書類審査やヒアリングを経て、本年8月初旬に、全国の国公私立の中から22の大学等を「研究大学」に選定しました(中間評価を経て、10年間続く予定)。そして、神戸大学もそのなかに入ることができました。

「研究大学」自身は大学レベルのこと、しかも理系に重点を置いたものようですが、我が文学部・人文学研究科も、今後は「研究大学」の中の部局としての真価が問われるでしょう。実際、「研究大学」の選定に続いて、全国の国立大学の学部・大学院に関する「ミッションの再定義」という作業が、本年後半に実施されます(医学・工学・教員養成分野はすでに終了)。神戸大学文学部・人文学研究科が然るべきミッションを獲得して、今後とも優れた人材養成や研究を行えるようにしたいものです。

二つ目は、教育のことで。

グローバル化に対応して、国際的な学生の受け入れや送り出しの制度の整備が急務となっています。受け入れは、ご存知のように、オックスフォード大学東洋学部日本学専攻の第2年次生全員(12名)を10ヶ月間、神戸大学文学部で教育するプログラム(「神戸オックスフォード日本学プログラム」)が始まったことに象徴されます。これは、従来の留学生の受け入れとは次元の異なるもので、留学生受け入れの新モデルともなり得るものです。幸い、文窓会からも多大の支援をいただき、本年7月末に第1期生は無事にプログラムを修了しました。修了発表会では、各学生が、日本に関する様々なテーマについて、上達した流暢な日本語によるプレゼンテーションを行いました。オックスフォード大生の才能と、神戸大学文学部の教育力が見事に融合して生み出された成果と自負しています。

一方、送り出しは、本年度より実質的に始動した「グローバル人文学プログラム」です。大学院生等の若手研究者の海外派遣事業はすでに実績があります

が、今回のプログラムは学部生・修士課程学生を対象として、外国語能力や外国語コミュニケーション能力を高めながら、積極的に海外留学等に送り出すことを目的としています。文学部でも学生の海外への関心は非常に高まっており、専門分野に関わりなく、海外へ出ることに関心のある学生が増加しています。また海外での長期留学等の経験が豊かな学生は、その海外経験が企業等から高く評価されて、順調に就職を決める傾向があるようです。文学部の新学生像が生まれつつあるのかもしれません。

三つ目は、学舎のことで。

文学部・人文学研究科の学舎改修が昨年秋にほぼ完了し、見違えるようになりました。かつては、学生の居場所と言えば、読書室や院生研究室が主なものでしたが、改修により、学生ラウンジ、コモンルーム、共同談話室などの新空間が創出されました。また図書館のフロアも一新され、とくに本年4月からは、神戸大学で最初のラーニングコモンズという新スタイルの学習空間が運用されています。なお、学舎改修に対しては文窓会から多額のご寄付をいただき、新学舎にふさわしい備品・調度類を揃えることができました。

担当係の職員によれば、改修にあたって省エネ設備を導入したのに、光熱費はむしろ増加の傾向さえあるそうです。つまり、これらの新空間等は空調設備完備ですので、学生の学舎利用時間が大幅に長くなれば、省エネ学舎とはいっても光熱費は増加します。学生が快適に勉学に励んだり、学生同士が交流したりする環境が、それほど豊富に用意されています。かつての学生にとっては想像もできない、明るく快適な学舎へと変身しましたので、是非一度お越しいただき、実感していただきたいと思う次第です。

次の半世紀へと、さらに飛躍しようとしている文学部・人文学研究科を、何卒、今後ともご期待・ご支援ください。

神戸オックスフォード日本学プログラム第1期生 修了発表会・修了式

7月29日、瀧川記念学術交流会館大会議室で開催された発表会では、12名の留学生がそれぞれ持ち時間10分の中で各自のテーマについて日本語でプレゼンテーション。質疑応答も盛り上がりを見せました。その後、修了式での修了証書授与、パーティーと続き、充実した1年間を無事終了。今回の留学体験が留学生たち個々の中でどのようなケミストリーを生むのか、大いに期待しましょう。



ラーニングコモンズでグローバルな視点から見た日本の文化などを学生たちと話し合うのが楽しみです。

グローバル人材育成プログラム担当 助教
ヴァラー・モリー Molly VALLOR, Ph.D.

私は2013年春学期より、神戸大学人文学研究科のグローバル人文学プログラムの専門科目を教えています。サンフランシスコの出身でハワイ大学を卒業してからスタンフォード大学大学院の博士課程に進み、日本の中世仏教文学を学んで今年6月に博士号を取得しました。学部また大学院時代は日本に留学しました。臨濟宗の夢窓疎石(1275～1351)を中心に、夢窓の作品や寺院について研究し、その和歌集も英訳しております。なお、グローバル人文学プログラムでは、万葉時代から明治時代の短歌までの英訳のポエトリーを通覧する講義、ハリウツ

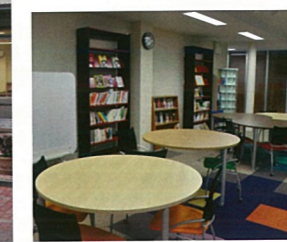
ト映画や英語の雑誌などにおける日本の伝統文化を考察するゼミなどを英語で教えています。また、人文科学図書館の新しいラーニングコモンズではオフィスアワーを開き、学生さんと楽しく会話しております。今回神戸大学の学生さんと一緒に古典文学を読んだり、グローバルな視点から見た日本の文化を話し合ったりできるのを大変ありがたく思っており、後期も大変楽しみにしております。

※オフィスアワー：教員が必ず一定の場所にいる時間帯を設け、学生からの質問や相談に応じること。

新しく生まれた新スタイルの学習空間、ラーニングコモンズ！



一新された図書館のあるC棟とA棟にまたがって図書室スペースがあり、ラーニングコモンズはA棟の窓辺に面した明るいスペース。開放的な眺めを楽しみながら、学年や学部を越えて、自習にディスカッションに集中できる場になっています。



人口の流出と「生きた証プロジェクト」

*在学時代は神戸大学ニュースネット委員会の記者として、4年間、阪神・淡路大震災の報道に携わり、3.11当日は現地で72時間リポーターを務めた塚本さんからの定点観測的最近レポートです。

8月9日から東北地方で降った記録的な大雨。岩手県内陸にある雫石町（しずくいしちょう）や紫波町（しわちよう）では、わずか半日で例年の8月ひと月分の雨が降りました。気象庁が「これまでに経験のない雨」と表現した豪雨の爪跡は大きく、いたる所で土砂崩れや冠水、浸水の被害が発生。当日、翌日と取材に走り回りましたが、後片付けをする住民が時おり手を止め、茫然としている様子も見られました。思い出の品を雨に流され、「震災にあった沿岸部の方の思いもわかる」と話した人もいます。表現が正しいかは判断できませんが、天災はいつどこで起きてもおかしくないもの、と再認識する機会になりました。

震災から2年と半年。また夏がやってきました。月命日などのイベントには「〇度目の開催」という冠がつき、主催者側も、私たち取材側も少しずつ慣れてきた印象があります。復旧事業が落ち着いたこともあり、新しい事業をスタートした人も多く見ら

れます。希望にあふれる取材を続けながら、復興に向けての確かな前進を感じています。

一方で、被災地はいま新たな課題を抱えています。人口の流出です。進まない町づくりへの焦りからか、仮設住宅を離れ、親戚などに助けを求めて内陸へ移住する人が増えています。これは大きな問題です。人こそが町にとって一番の財産。慎重かつ丁寧な計画とは反するかもしれませんが、行政も町づくりにおける素早い決断を求められています。



奇跡の一本松（陸前高田市）

東京支部便り

神戸大学文学部（東京支部）第十回同窓会（文窓会）及び木曜会のご案内

1) 同窓会

日時 2013年10月24日(木) 16:00~17:00

会費 1,000円(茶話会)

議題 ①今後の同窓会の運営について ②その他文窓会の現状報告&歓談
(茶話会は定席としますが、そのあと18時までは自由にご歓談下さい。)

2) 木曜会

日時 同日 18:00~20:00

(18:00~19:00) 神戸大学大学院人文学研究科准教授・古市 晃先生による講演会

講演内容 「聖徳太子の虚像と実像」

(19:00~20:00) 講演者を囲んでの懇親 Party

会費 4,000円。但し非会員は5,000円、平成20年以降の卒業生及び女性は3,000円。

開催場所 (同窓会&木曜会ともに)：神戸大学東京六甲クラブ(旧名：凌霜クラブ)

住所：千代田区丸の内3-1-1 日比谷帝劇B2

電話：03-3211-2916 FAX：03-3211-3147

準備の都合上、ご返事を10月17日(木)までお願い致します。

古市 晃先生

【専門分野】

日本古代史。特に、古墳時代から飛鳥時代にかけての国家形成史が中心。仏教史、都市論にも関心を持つ。

【学歴・職歴】

1970年 岡山県岡山市生まれ。岡山大学文学部卒業、大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程退学。1996年財団法人大阪市文化財協会調査員、2001年大阪

歴史博物館学芸員、2006年花園大学文学部専任講師、准教授を経て2009年神戸大学大学院人文学研究科准教授に就任。

【主な著書・論文】

「日本古代王権の支配論理」(塙書房)、「王名ササキについて」(栄原永遠男編『日本古代の王権と社会』塙書房)、「五・六世紀における王宮の存在形態—王名と叛逆伝承—」(『日本史研究』587)、「聖徳太子の号と王宮—上宮・豊聡耳麻戸—」(『日本歴史』768)、「倭王権の支配構造とその展開」(『日本史研究』606)

東京支部会長：中野 裕 (36年卒)

副会長：五味尚子 (37年卒)

副会長：田中 勉 (47年卒)

中野自宅 Tel & Fax: 045-561-6317

Eメール: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

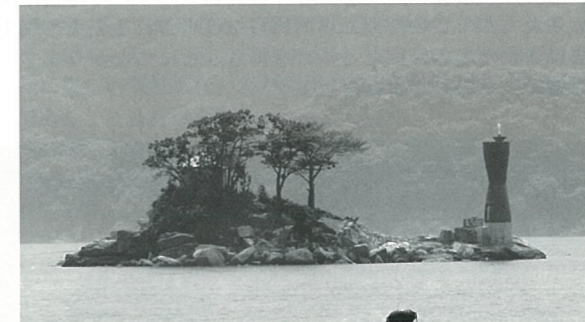


岩手朝日テレビ 報道制作局 報道制作部

塚本 京平 (平成22年卒業 社会学専修)

自分が住んでいた町を去ることは大きな決断です。特に震災で家族を亡くした人にとっては、面影の残る町を離れることとなります。まだ行方不明の方もたくさんいるため、できることなら留まりたかったという方も多いのではないのでしょうか。

そんな中、大槌町である活動を始めた1人の男性を取材しました。役場で広報担当を務める但木汎(たつきひろし)さんです。43年務めた新聞社を退職し、4月から町役場でセカンドキャリアが始まりました。震災取材で何度も訪れた町から、経験を復興に活かしてほしいと声がかかったそうです。担うのは、町が進める「生きた証プロジェクト」。震災で亡くなった町民1人ひとりについて、家族や知り合いから情報を集め、生前に描いていた思いや亡くなった状況をまとめる計画です。「僕らにとって一番必要なのは、亡くなった方の声を聞くこと。遺族に会って人柄を聞いて亡くなった状況を再現するのは、僕らの大きな役割」と再びペンを握りました。目標に向かって、



ひよっこりひょうたん島のモデル・大槌町 蓬萊島

取材はこれから本格スタートです。

生きた証を生まれ故郷に。住居は移っても、思いが留まれば、地元は故郷であり続けます。震災で注目を集めた「地元意識」。プロジェクトの完成版がどんな形になるにせよ、被災者にとって、亡くなった家族のそばで暮らす意識が生まれるきっかけになることを期待しています。新しい活動とともに、「残していく」活動にも注目しています。

中部支部便り

5月25日、〈中部支部〉の総会・懇親会を開催。

記念講演：「秀吉—『革命』の軌跡」藤田達生さん(三重大学教育学部長)

中部支部の第8回総会・懇親会が、5月25日、名古屋・池下のホテル「ルブラ王山」で開かれた。神戸から参加の池上淑子会長、事務局担当の坂本直樹さんに加え16人が集まった。昭和42年西洋史学卒業の河原宏子さん(岐阜県各務原市在住)、昨年大学を卒業したばかりの川瀬奈津子さん(地理学、岐阜県大垣市在住)が初めて参加した。また三谷竜彦さん(平成8年哲学、三重県四日市市在住)も久しぶりに出席、会は大いに盛り上がった。

英国オックスフォード大学からの留学生受け入れが始まり、文窓会も協力している」ことなど、文窓会の近況が報告された。次いで事務局担当の坂本さんの発声で乾杯、ビールを飲みながら各人が近況を語り、今なお探究心は衰えず、大いに語り合った。この笑顔、また再会を。(中部支部・勝原 博)

***来年の中部支部第9回総会・懇親会は5~6月頃に開催の予定です。**

初めての方もお気軽にご参加ください!!

ご連絡・お問い合わせは下記アドレスの勝原 博まで。

Eメール katsuhara@mb.ccnw.ne.jp



新入生と文学部の先生、院生とのコミュニケーションチャンス 文窓会主催「新入生歓迎ティーパーティー」が今年も大盛況

去る5月8日(水)、文学部本館1階のホールにて、恒例の新入生歓迎ティーパーティーが開催されました。新入生全員が参加している、と思われるほどの盛況ぶり、軽食や飲み物が用意された会場は新鮮な熱気に包まれていました。

このパーティーは文窓会の主催により毎年この時期に開かれており、今年は4回目になります。入学して間がない新入生たちが、この時期に専門科目を担当される先生や院生のみなさんとじっくり話す機会を持つことは、大学で勉強するにあたっての確固たる指針を得ることにつながります。先生方と交わされた会話が新入生たちの将来の歩みに与える影響は大きい、と言えましょう。



南三陸町を訪ねて

西川 京子(昭和44年卒業 西洋史学科)



2013年2月16日、公益社団アジア協会アジア友の会(アジア協会)の仲間と南三陸町を訪ねた。東日本大震災からほぼ2年経つが、まだ被災地を訪れたことはなかった。現地では奮闘する仲間がいる。私も、これからでも、ほんの少しでも、長く続く何かが出来ないかと考えていた。

アジア協会は、アジア各国に井戸を贈る活動を軸に、インドやミャンマーでの教育支援、バングラデシュやネパールでの貧困対策など活動の場はアジアが中心だ。しかし、東日本大震災の復興支援には当初からかかわっている。

今回の旅の主な訪問先はふたつ、南三陸の山と海の幸を直売する「みなさん館」と「石泉ふれあい味噌工房」だ。伊丹発9時45分の日航機は、11時過ぎに仙台空港に着いた。

アジア協会スタッフで、東日本大震災支援プロジェクト担当のさとこさんに迎えられ、車で北東に走る。窓の外は雪がまだらに残った更地が続く。所々ががれきの山も見える。

目的地の南三陸町まで約2時間の間に、さとこさんからいろいろな話を聞いた。

アジア協会が支援先として南三陸町を選んだポイント

は3つ。まず被害が大きい場所、次に、仙台や石巻、気仙沼といった中都市以外、そして、アクセスが難しいため支援の手が届きにくいような場所だった。支援は炊き出しから始まった。現地で活動を行うにあたり、隣の登米市のNPO法人の協力も大きい。

半年ほど炊き出しを行ったが、これからは生業ができるかたちでの支援がより重要だと考えた。何が必要とされているか、地元の人々と触れ合いながら決定したが、地元産品の直売所と味噌工房の建設だったという。

話している間に、南三陸町に入った。被害が一番ひどかった歌津の海に面した伊里前地区は、道路から海岸まで一面更地のままだ。その中に、南三陸防災庁舎の三階建ての鉄骨がぼつんと残っていた。「津波がきます、早く非難してください」と、くり返し住民に呼びかける若い女性の声、彼女自身は津波にのまれてしまったという震災当時の報道が今もはっきりと心に残っている。



車は、やがて海岸線から高台に向い、最初の訪問地「みなさん館」に到着した。明るい店内の左手は直売ブース、右手は20席ほどの飲食スペースになっていた。先ずショッピング、買い物籠に、わかめ、昆布、味噌などをほうりこむ。「いつもおばあちゃんの復刻かりんとん」が目に入った。手にとって裏を見る。

今年退職された先生方

今年3月に退職された国文学の林原純生先生に近況を伺いました。先生は国文学専攻の21回生(昭和48年卒業)の同窓生でもあります。

退職、その後

林原 純生



今年の三月三十一日で定年を迎え、今は職についていないので教員としては全くRETIREな身ですが、それでも多忙な毎日を送っています。それは、退職したらあれもやりたい、これもやりたいということが多くありますが、できるだけ毎日を動かそうとしていることが主な理由です。

私の住居は阪急宝塚線の売布神社駅から北へ、ちょうど阪急六甲駅から文学部に行くように山を登る位置にあります。中山山系という山です。地図で確認していただければ分かりますが、小さな山です。昔は清荒神清澄寺と中山寺が所有する森林でしたが、明治四年の社寺土地令によって官有地となり、その後開発が進みましたが一部は林野庁の管轄する国有林として残り、宝塚自然休養林に指定されハイキングコースになっています。中山の住宅街と陸上自衛隊の演習地に挟まれた低い小さな山地ですが、私の運動には十分の場で、午前中はほぼ毎日のように山に登り、午後は主に読み残した本を読んで終わります。少し恥ずかしいのですが写真を添付します。

私の後ろに見えるのは甲山です。

なにか、毎日仕事に追われている卒業生や、今も文学部にご尽力しておられる文窓会の方達には申し訳ないようなノンビリした私の今の日常ですが、このような時間を退職後に楽しむ気持ちは、神戸大学の文学部で過ごしたおかげであることは言うまでもありません。

文学部で勉強を始め、教員として定年退職した神戸大学での時間は、時には難しいこともありましたが、その充実と勉強のしかい、働きがいのある場であったことによって、今の落ち着きをもたらしてくれました。山歩きを楽しむ精神的な余裕です。この余裕はこれから先の私の計画しているいろいろな仕事に力を蓄積してくれるでしょう。

緑の木々の間を歩いていると、はるかに年上の人達が息も切らせずに、仲間と談笑しながら私を追い抜いて行きます。神戸での思い出に、そんな脚力を付け加えたら、私は当分は無敵になるのではないかと、楽しく考えています。

*定年退職	佐々木 衛	社会学教授(元研究科長)
	百橋 明徳	美術史学教授
	山口 光一	ヨーロッパ文学教授
	林原 純生	国文学教授
*辞職	大城 直樹	地理学准教授

「故郷南三陸に帰省した時、『おばあちゃんのかりんとん食べたいね〜』と話しがでた。津波でいなくなったままのいつものおばあちゃん。孫の私はおばあちゃんの『かりんとん』作りをいつも横にいて手伝っていた。思い出と記憶をたどりながら作ってみた。できあがったかりんとんをバリッポリッと食べた時、皆から笑顔がこぼれた……」



買った物をすませ、昼食を終えた頃一人の青年が入って来た。「夢未来南三陸協議会会長で、『みなさん館』責任者の千葉さんです。震災の当時とその後について話していただきます」とさとこさんが紹介した。本業の水産加工工場は津波で流されてしまった。彼にとって工場の再生が急務だが、「町のことも誰かがやらなくては」と千葉氏。

「復興は遅れてます。国や自治体の動きも遅いし、役所や消防署などの働き盛りがたくさん亡くなったのも影響していますね」

「みなさん館」は、2012年10月7日にオープンしてほぼ4ヶ月、「品揃えも運営もまだまだですが、1年間は助走期間だと考えています。ここは、物を販売するだけでなく、人の集まる場所にしたい」と熱く語った。

「がんばってください!」と、挨拶を交わし、「石泉ふれあい味噌工房」に向かった。工房では、エプロン姿の三人のおばさんが箱詰めの作業中だった。小さな工房の隅に、米と大豆の袋がいくつも置いてある。それぞれの袋には名前と数字が書かれていた。

「うちはこの大豆で、塩と麴の割合は××で作ってくださいと、各家庭から注文がきます」

歌津の人々にとって味噌は特別の存在だ。昔から、各家庭が樽一杯の味噌を仕込み、それぞれの味を大切に守り伝えてきたそうだ。避難所でも、一杯の味噌汁で、悲しさや寒さで凍りついた皆の顔がほっと安心した顔になったという。歌津の味噌造りを守り継ぐ大切さを感じていた主婦達がいたが、農協にあった樽や機械は、瓦礫に埋まっていた。

アジア協会のボランティアが、炊き出しの時にこの手作り味噌のおいしさに出会った。

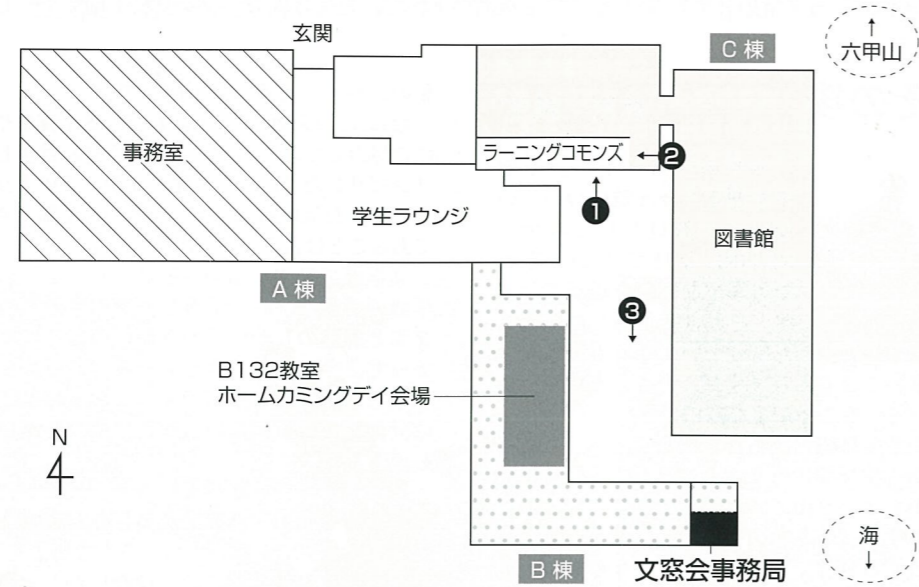
「これよ!」と生業支援の対象が決まり、「石泉ふれあい味噌工房」の建設が始まる。2012年4月にプレハブ工房が完成し、6名の主婦が中心となって製造が始まった。以前は、当たり前の味噌だったが、震災に襲われた時、それは「生き抜く力」となったという。



いろんな人達に出会ったが、復興は厳しく、問題は山積しているようだ。アジア協会は、様々な手段で継続的支援を考えている。私も、メンバーの一員として、先ずは美味しいワカメや味噌、そして、あのかりんとんを買うことから始めよう。

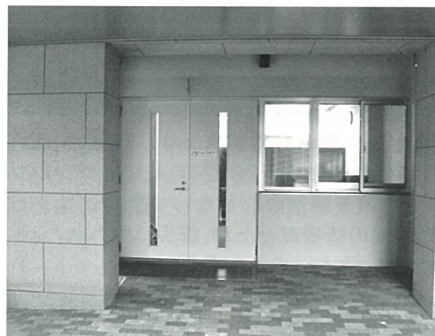
ゆったりマイペースで学べる新学舎に!! (文学部・人文学研究科の学舎配置図)

10月26日(土)のホームカミングデーで、大きく変わった学舎を体感してみたいかたがでしょう。



①から見たラーニングcommons。正面に見える明るくオープンな窓沿いのスペースです。②から見たラーニングcommonsの入り口付近。③から見たB棟(正面)の左端に文窓会事務局があります。左学舎は図書館のあるC棟です。

文窓会の事務局(広さ約14㎡)が文学部内にオープン!



人文学研究科B棟、1階です!

文窓会はこれまで、必要に応じて「多目的室」という部屋を大学から借りるなどして、会合を行ったり備品や書類を収納したりしてきました。しかしこの度、大学と正式に賃貸借契約を結び、「多目的室」であった部屋の半分を借りる形で事務局を開設するにいたしました。

事務局には電話・faxのほか、事務机はもちろんのことパソコン、プリンター、ホワイトボード、キャビネットなどの什器・事務機器類が用意されています。

現在は毎週月曜日ですが、私、坂本(社59年卒)が事務局に詰めています。住所や勤務先に変更があった際はもとより、文窓会の活動に関する事で何かございましたら遠慮なくご連絡いただければ幸いです。

【文窓会事務局】

場所 神戸大学文学部
人文学研究科B棟 1階
広さ 約14㎡
住所 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内
電話 078-806-7207(月曜のみ)

メールアドレス kobeuniv.sakamoto@gmail.com

★お急ぎの方は 神戸大学文学部 078-803-5595 にご連絡ください。



伝説の登山家・冒険家 ~高木正孝先生の生誕100年によせて~ 文窓会ホームページをご覧ください。



文窓会のホームページ<イベント>に高木先生に捧げられた記事の一端を掲載しています。

この記事は、昭和28年1月16日から神戸大学文学部の助教授(心理学)をつとめられ、昭和37年に、神戸大学南太平洋学術調査隊長として赴いた南マルケサス諸島で、野外調査の最中に遭難し亡くなられた高木先生の豪快で愛すべき人柄を偲んで、山岳部OBの豊田寿夫氏(工学部卒)が神戸大学山岳会の機関誌『ACKU-news No38』に寄稿されたもの。

「チャカさんの欧州10年-高木正孝先生の生誕100年によせて」と題され、日本有数の登山家としても広く知られ、神戸大学山岳会の日本・チリ合同パタゴニア探検で登攀隊長としてアレナレス峰初登頂(1958年)に成功するなど数々の記録的偉業を遂げられた高木先生へのオマージュにあふれています。

高木正孝

1913-1962 昭和時代の登山家。大正2年3月12日生まれ。昭和15年ヨーロッパにわたりベルリン大山岳会に属してアルプス登山をおこない、ガイドの資格を取得。28年第1次マナスル隊の登攀隊長、33年神戸大パタゴニア探検登攀隊長などをつとめた。昭和37年南太平洋諸島の学術調査中行方不明となる。49歳。東京出身。東京帝大卒。著作に『パタゴニア探検記』(岩波新書 青版)。訳書に今も版を重ねる『人間はどこまで動物か』(アドルフ・ポルトマン;高木正孝訳、岩波新書)は心理学徒だけでなく、人間にかかわるあらゆる学問分野の必読の書となっている。

INFORMATION

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報紙「風」編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。

神戸大学学友会を構成している同窓会 事務局は神戸大学企画部社会連携課

- 文窓会(文学部)
- 紫陽会(教育学部・発達科学部)
- 社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科)
- くさの会(理学部)
- 社団法人 神緑会(医学部医学科)
- 就進会(医学部保健学科)
- 社団法人 神戸大学工学振興会 KTC(工学部)
- 六篠会(農学部)
- 翔鶴会(国際文化学部)
- 海神会(海事科学部)

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いです。神戸、大阪、東京でそれぞれが活動を展開しています。神戸K・U・Cは元町牡丹園に事務所を開き、講演会、読書会、ゴルフ、旅行など、楽しい催しを実施しています。

ご入会ご希望の方は TEL 078-334-1323 までご連絡ください。(K・U・C運営委員 日高 健一)

文窓会ホームページをご利用ください!

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。イベント告知や卒業後の近況報告、創作作品の発表、さらには自分のブログやホームページの紹介など、いろいろな形で利用が可能です。利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。 kobeuniv.sakamoto@gmail.com (担当:坂本/文窓Web担当、社会学32回生)

編集後記

次々に新しくなる文学部。その息吹をお届けできたでしょうか。学部から巣立った同窓生たちはさまざまな思い、カタチで活躍している。世代は異なっても、身近にそんな生き方と触れ合えるのも文窓会の良さではないでしょうか。ホームカミングデー(10月26日)にもぜひ足を運んで、また新たな出会いの刺激を楽しんでください。(担当:たなかむつこ)

文窓会役員(平成25年9月末現在)

会長 池上 淑子(43年卒・社会学)

<その他の役員>

日高 健一(36年卒・芸術学) 武藤美也子(43年卒・国文学) 田中 睦子(46年卒・芸術学) 廣野 幸夫(43年卒・社会学)
花木 直彦(36年卒・国史学) 吉田 浩次(43年卒・社会学) 坂本 直樹(59年卒・社会学) 宮崎 典久(63年卒・国史学)
田中 賢司(42年卒・社会学) 西川 京子(44年卒・西洋史学)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

http://www.kobe-u.biz/bunsokai/ (検索→文窓会)